

出羽北部の古代水上交通と交流 —古代遺跡と史料からみる—

小松 正夫（秋田市教育委員会）

1 はじめに

古代出羽においては、7世紀の阿倍比羅夫の遠征や、天平五年（733）には庄内出羽柵を秋田高清水に一挙100km北進、さらに全国で唯一河川の駅である水駅が集中する等、海上・河川に伴う遺跡、遺構、遺物が認められていることから、出羽北部の水上交通に関連する遺跡や地理的環境について述べることにする。

2 古代北海道との交流

能代市寒川Ⅱ遺跡は、4世紀から5世紀代の土壙墓群で、墓壙形態と副葬品である後北C式土器（図1）、横手市田久保下遺跡は、近世アイヌが所持する「マキリ」等の例にみられるような柄頭が逆反りする刀子が出土するなど、北方交流を示す遺跡として注目される。また北大Ⅰ式土器が出土した由利郡西目町宮崎遺跡は、海岸から直線で約1.4km東に位置し、遺跡の東に開けた水田とは比高差がわずか2m前後で、絵図（図2）でみるように江戸期には大きな沼地を形成していた。西目町史によれば、文政十一年（1828）に干拓が行われ現在の水田が形成されたが、古代においては日本海から入り江を経て西目川を上り、沼地（旧西目潟）の西砂丘地に営まれた遺跡ということになる。旧西目潟は、入り江と小河川で結ばれ、まさに海上交通にとって自然の良港を呈していたと言えよう。



図1 後北式土器



図2 本荘藩領内絵図（部分）
（本荘市郷土資料館）

宮崎遺跡

西目潟

3 古代越後・北陸との交流

北陸との海上交通を示す史料に、阿倍比羅夫が越国から180艘の船団を連ねて、秋田、能代、津軽、道南方面まで北上した斉明天皇四・五年（758・759）の遠征記事がある。比羅夫の経由地と思われる男鹿半島周囲、旧八郎潟（図3）は、5世紀から9世紀代に、漁場としてばかりでなく湊としても活用されていたものと考えられる。平成9、10年に発掘調査された州崎遺跡（図3）は潟の東側に位置

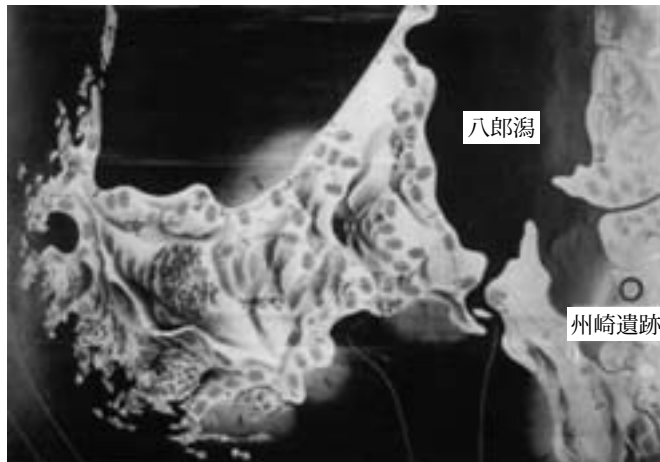


図3 正保四年出羽一國絵図（秋田県立図書館）

し、濠が確認されるなど海から潟を経由する中世の湊町と考えられている。

秋田城の西側に営まれた後城遺跡は8世紀前半から9世紀後半にかけての竪穴住居を中心とする集落遺跡である。遺跡からは、北陸系、上野系の須恵器が出土し、秋田城の管理下に置かれた集落と考えられているが、一方では、擦文土器の文様を思わせる**甕形土器**（図4）も認められ北海道等、海上交通を考える上で注目される。

4 大陸との交流

出羽国には神亀四年（727）から延暦十四年（759）まで、渤海使節の5回の来着記事が認められる。その中で、来着地が記されているのは「賊地野代（能代）湊」「夷地志理波村」のみであるが、安置供給先の一部が常陸、越後国にあったこと以外、施設等の詳細については不明である。

出羽国に到着した渤海使の対応にあたった官衙は不明であるが、出羽国府が置かれていたと考えられている秋田城跡からいくつか注目される資料が発見されている。



図4 後城遺跡出土土師器
甕鋸歯状刻文



図5 水洗厠舎跡

①水洗厠舎跡沈殿槽内出土の寄生虫卵

秋田城跡東辺外郭線の外側、鶴ノ木地区で検出されたSB1351水洗厠舎跡（図5）から発見された寄生虫卵（図6）である。時期は、木樋の年輪年代から756年以降、廃絶は出土遺物等から9世紀初頭と考えられている。寄生虫卵は、回虫、横川吸虫、日本海裂頭条虫、有・無鉤条虫等が検出され、このうち有鉤条虫は豚を中間宿主として人に感染することが知られているが、奈良時代の日本では豚を常食する習慣はなかったと考えられている。中国で

は豚の飼育が盛んに行われていたことが『墨子』「備城門」や古墳から副葬品として出土する陶器の豚便所「猪圈」等で判明していることから、大陸からの使者が使用した可能性が指摘され注目された。

② 罽釜

罽釜の時期は、出土層位及び伴出土器から8世紀後半頃と考えられる。製作年代と形態から大陸の可能性が指摘されたことから分析を行ったが、素材の産地を明確にするには至らなかった。



図7 罽釜

から北陸に移行している時期であり、大陸からの使節との関連は検討を要する。

5 元慶の乱の史料から見る水上交通

元慶二年（878）、秋田城が焼き討ちされた俘囚の反乱は『藤原保則伝』によれば、1千余人の賊が小舟で秋田城を襲撃している。乱の主謀者は、秋田城以北十二村で旧八郎潟周辺から秋田県北部鹿角市周辺の村々まで及んでいる。県北の村は米代川経由で日本海に、八郎潟周辺の村落も秋田湾を南下し、雄物川河口から上陸し秋田城の南、北、西から攻め込むことが可能である。しかし、一時的に大量に確保した舟数から、主力は八郎潟の周囲で漁業を生業としている俘囚と考えられる。絵図(図3)の如く、潟の出入り口が南に開いた旧八郎潟は、干拓前までは豊富な漁獲量のある漁場であったと同時に自然の良港であったと考えられる。

6 おわりに

古代出羽国沿岸は、阿倍比羅夫の遠征や渤海使節等の度重なる来着もあり、河口や入り江、それに八郎潟や旧西目潟のような潟湖が人や文物の交流に大きな役割を果たしてきた。また、古代東北の城柵は、大・小河川の中・下流域や河口付近に造営されているものが多く、物資の輸送や人的交流等必然的に何らかの形で水上交通に関わりを持っていた。さらに、河川交通においては駅伝制による水駅が最上川、雄物川を中心に設置されていたが、水量によって激しく変化する河岸地域ということもあり、海上交通の湊も含めその位置や施設等については不明であり、今後の課題であろう。

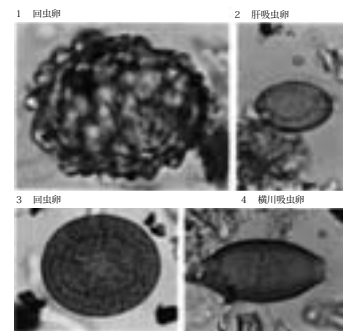


図6 寄生虫卵

③ 墨書土器＝「客人」

第44次調査で出土した墨書土器(図8)である。秋田城の来訪者＝「客人」に供する食器の可能性が考えられている。使用対象者は不明であるが、律令側の官人や蝦夷の饗応等の使用は考えられない。土器の年代は、9世紀前半と考えられることから、すでに渤海使の来着地が出羽方面から

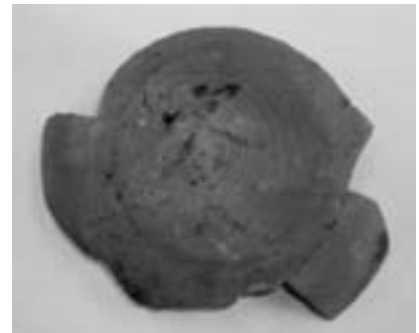


図8 墨書土器「客人」